

<原著論文>

共同体形成の困難な社会 —— 高齢者との関連において ——

A Society in which Forming a Reliable Community is Difficult:
From the Perspective of Support to Elderly People

船木 祝 (札幌医科大学)
Shuku FUNAKI (Sapporo Medical University)

要旨

私たちは独立した個人としてだけでなく、さまざまな共同体の成員として生活する存在である。しかし共同体の中に入ることは面倒な気持ちや不安感が先立ち、困難なことがある。その背景のひとつに、日常生活や社会生活にあって相互理解が育まれなかったり、対立関係が助長されたりする場面を経験することがあげられる。

配偶者との死別等において一人暮らしを続けていく独居高齢者は、同居家族がいた頃よりも一層人との交流を求める気持ちを強めていくことが多い。しかし、共同体に入っていくことを望みながらもそこに入っていくことに困難を感じたり、そこから離れていったりする高齢者がいる。共同体よりも個人を優先しようとの社会の風潮が、高齢者の生活にも影響を及ぼしているといえる。

本稿では、これらの現状の理解と課題解決に対する示唆を得るために、現代社会の共同体形成の阻害を問題視した代表的哲学者、チャールズ・テイラー、マーサ・ヌスバウム、エディット・シュタインによる分析を考察する。テイラーは私たちの文化の道徳的源泉に立ち返ること、ヌスバウムは、人生全体における自己理解と自己受容の必要性を、シュタインは、自由に基づいてこころを開くことの重要性を説いた。独居高齢者へのインタビュー調査においても、対話の大切さ、世代間交流の意義、共同体形成の困難とそれへの希求の気持ちが確かめられた。

さまざまな困難に直面するとやはり人は共同体から離れていく傾向をもつであろう。そうした困難な中にあっても、共同体形成への道を模索し続けることは現代社会の抱える重要な課題のひとつであると考える。

Abstract

We live not only as independent individuals but also as members of various communities. However, many people find it extremely difficult to enter into a community. Anxiety is widespread in modern society. Antagonism and a lack of understanding between people are ever present in our everyday and social lives.

Once they are living on their own, the elderly may seek social exchanges more than they had previously. Nevertheless, they find difficulties fitting into a community, which consequently results in them distancing themselves from human relations. The trend of the world in which individuals are prioritized over the community has a great influence on the lives of these elderly.

In the present study, I focus on the present type of society in which we live from the viewpoints of philosophers engaged in the problems of communities. Among them, Charles Taylor stresses the significance of returning to a moral source in our culture. Martha C. Nussbaum argues for the necessity of a lifelong self-understanding and self-acceptance. Edith Stein stresses the importance of an open-minded attitude.

People trend to try to escape from a community, when they face various difficulties. Finding a way of forming a reliable community is one of the most important issues in society today.

Keywords : 共同体 (community) 道徳的源泉 (moral source) 自己理解 (self-understanding)
こころを開いた (open-minded) 独居高齢者 (elderly people living alone)

I. はじめに

私たちは独立した個人としてだけではなく、さまざまな共同体の成員として生活する存在である。しかし共同体の中に入ることには面倒な気持ちや不安感、恐怖感が先立ち、困難なことがある。また、いったん共同体に入ったとしても、抵抗、誤解、陰口などを経験することにより、そこから結局離れてしまうこともある。だからといってひとりの世界に閉じこもってしまうと、他者と対話することで見出される個人のアイデンティティの発見も、さまざまな価値を理解したり共有したりすることで感じられる喜びも達成されない。東日本大震災の折に、日本では「きずな」ということが叫ばれ、困難な状況下、お互いに助け合おうという潜在的に隠れている気持ちが表面化した。しかし、そうした機運は時間とともに風化していき、潜在的可能性の芽はまたしぼんでいるように思われる。その背景のひとつに、日常生活や社会生活にあって相互理解が育まれなかったり、対立関係が助長されたりする場面を経験することがあげられる。

このような社会の風潮は高齢者の生活にも影響を及ぼす。とくに、配偶者との死別等において一人暮らしを続けていく独居高齢者は、同居家族がいた頃よりも一層人との交流を求める気持ちを強めていくことが多い。高齢者はもともと人との交流にこころを閉ざしているわけではない。中には趣味の集まりや自治体の活動等に活力源を見出し、生き生きとした日々を送る高齢者もいる。その一方で、人との交流を求めながらその機会が得られなかったり、いったんは趣味の集まりや自治体の活動等に参加しながらも、その後そこから離れていったりする高齢者もいる。

共同体に入っていくことを望みながらもそこに入っていくことに困難を感じたり、そこから離れていったりする事態は、何も高齢者に限って生じているわけではない。むしろ、共同体よりも個人を優先しようとする社会の風潮が、高齢者の生活にも影響を及ぼしているといえる。そこには考察すべき次のような問があると考えられる。すなわち、私たちは共同体形成の観点から見てどのような社会に暮らしているのだろうか。私たちが思案すべき原点はどこにあるのだろうか。自己存在及び人間存在についてどのような理解をもったらいのだろうか。そして現状を踏まえたうえでどのような態度をとればいいのか。以下、これらの問いに対する示唆を得るために、現代社会の共同体形成の阻害を問題視した代表的哲学者による分析を考察してみたい。

II. 共同体形成の問題についての哲学的考察

1. 対話の閉鎖と再解放——テイラーによる哲学的分析

リベラリズムを批判し、「人を周囲の人々と本質的に結びついた存在としてとらえる」共同体

主義者のひとりであるチャールズ・テイラー (Charles Taylor)^{1) 2)} は、現代社会の問題点を次のようにまとめている。テイラーは人間の生は元来、対話的性質のものであるという。対話が共同体形成の基盤になる。しかし、対話は現代社会では阻害されている。その事態をテイラーは自己中心的滑り坂と呼ぶ。現代社会では社会的アトミズム、極端な人間中心主義、非人称的なその場かぎりのつきあいの傾向が助長されている。したがって、濃厚な差し向かいの人間関係も築きにくい。そのような状況に至った要因としてテイラーは、ある目的に対するもっとも効率のいい手段を考える「道具的姿勢 (instrumental stance)」の傾向が過度に強まっている点をあげる。他者の存在価値はある目的のための効率のいい手段として計算される。さらに、道具的姿勢は自己に対する関係においても支配する³⁾。自らの存在をある目的達成のためだけの手段として扱うならば、その目的が達成されたとしてもまた次の目的の達成に追われ、いつまでも充足感は得られない。まして目的達成に挫折するならば、自らの存在価値は感じられなくなる。

テイラーによれば、こうした道具的姿勢に終始しがちな他者及び自己との関係性の中で、それならば他者との関係性を切断することで自らの自己像を実現しようとして、他者との関係から遠ざかる形の理想もあるが、それもけっして望ましいものではない。対話の道が閉ざされれば、よりよい社会の実現も、親密な領域の関係性も、ひいては自らのアイデンティティの形成も不可能になるからである³⁾。

そのような事態にあって、だからといって単に道具的姿勢を非難するだけでは、打開の道は切り開かれないであろう。文化を全面的に非難してもよりよい方向へと社会は向かうわけではない。テイラーが相互の平等性を承認し合うような開かれた対話の実現のために何よりも提唱するのは、ある価値観の合意である。それは、私たちが理性をもち、愛し、記憶し、対話する存在であるという実質的合意のことである。この共通理解のもとにはじめて、開かれた対話が可能になる。これらの価値に対する理解が得られなければ、対話は困難になる。また、その価値観の共有のもとで、歴史、自然、人間同士のニーズ、市民の義務といった、個人の利害関心を超えた視点に立つような対話も可能になる³⁾。

たとえ共同体形成が困難な様相を呈しているとしても、そうした現実の状況から離れることによって個人の生活の安泰を守ろうとすることをテイラーはよしとしない。状況から離れず、状況に入っていく中で、現実の人間、生身の人間の身体的状況やさまざまな情動、伝統的生活形態等にも触れていくことができる。そのような接触においてこそ、それぞれの「文化に生命を与えている理想について共感をもって論議する」ことが可能になる。すなわち、道具的姿勢に偏ってはいなかったところの、もともと私たちの文化の中にあった「道德の源泉 (moral sources)」の発見がなされるとテイラーは言うのである。たとえば、テイラーは、道具的姿勢をむしろ背後で支える理念であったところの、歴史的にあったひとつの道德的源泉として、「実践的で普遍的な博愛の精神 (practical and universal benevolence)」をあげる。元来あったところのその精神を呼び起こすことで、道具的理性の暴走を食い止めることも可能になるはずである³⁾。

以上のテイラーによる対話の道の閉鎖とその再解放の可能性への指摘は、現代社会の状況を捉えていくうえで重要な示唆を与えると考える。そもそも対話の価値に対する共通理解がなければ、対話は成立しないであろう。

2. 高齢者に対するスティグマ——ヌスバウムによる哲学的分析

アリストテレスの「徳」倫理学⁴⁾ に即して、現代の諸問題を再考しようとするアリストテレス派のひとりであるマーサ・ヌスバウム (Martha C. Nussbaum) は、スティグマ、すなわち、「特定の人間集団に対する極端に否定的な評価や、他の集団に対する明白で公然の冷遇」^{5) 6)} が共同体形成の大きな阻害要因であることを示した^(注1)。ヌスバウムによれば、リベラルな立場はこ

のスティグマの問題を直視していない。ジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill）の『自由論』（1859）を代表例とするようなリベラルな個人主義に基づくことによって、現代社会においては、他の援助を受けず、自分の力で判断して生活を計画、管理するという自立の重要性が強調されてきた。しかし、そうした思潮において、多くの人が自己のコントロール能力の拡張を目論む中で、排除的、従属的立場にいる者の状況への視点が背後に押しやられた。また、単に人格を相互に尊重しようと称えるリベラルの立場だけでは、人間の複雑な心情を把握することができない^{1) 7)}。

近代以降の社会においては、さまざまな差別が問題となった。このような差別を生じさせている原因のひとつにスティグマがある。このスティグマという困難な問題に立ち向かうような哲学が求められている。スティグマを理解するためには、人間の複雑な心情を分析する必要がある。ヌスバウムによれば、高齢者に対する差別には、他の階級、人種、性別などに対する差別とは異なる特徴がある。高齢者に対する差別には、その状況が「将来の自分なのだ」という意識が根底にある。すなわち、中年期までの世代の者は、まだ「自分はあるな風ではない」と思い高齢者集団と自分を区別しようとするのだが、その態度の根底には、いずれ自分もあるな風になるという恐怖が隠れている。その恐怖には、「自分もあるな風に衰弱し、……腐敗していき、死に近づいていく、という見通しに対する、一種の嫌悪感（disgust）」が伴う。そのような嫌悪感からスティグマが生じ、高齢者に対する真実ではなく幻想に基づくステレオタイプが形成されるとヌスバウムは言うのである。このことによって、高齢者はその個々人の能力が評価されずに、「全体として、すべての生機能にわたって若い人より能力がないと想定され」ることになる。しかし、高齢者集団を外集団と位置づける集団にも、いずれ長く生きたらその一員になることを避けられないという恐怖が影を落としている。したがってヌスバウムは、高齢者に対するスティグマは、将来の自己に関わることであるがゆえに、自己に対する嫌悪感、ひいては自己排除を含むと述べる⁸⁾。

医療関係者もそのようなスティグマから免れていない。医療者が、衰弱や病気に見舞われる高齢者集団の、まだあるはずの認知能力や運動能力を低く見積もり、それを単に自然で「正常な老化現象」として捉えてしまうと、高齢者の方も「やっても無駄」という後ろ向きの姿勢となり、身体と精神を鍛えなくなってしまう。一方、高齢者の知力及び体力を増進させようとのシニア向けの運動トレーニングや教養等の教室があるが、そのような集団隔離にも、ヌスバウムによれば、ひとつの弊害があるという。それは、世代間の友情関係を後退させることである。たしかに家族においては個人的な世代間交流があるかもしれないが、それは「専門的分野での実務能力や、……好きな活動への注目」を促すものではない⁸⁾。社会における他世代との交流が望ましい。しかしそのためには、まず若い世代が、将来の自分の存在を含む、自己の全体的存在に背を向けないことが求められる。さまざまな年齢を生きる自己を受容するという課題に向き合うことが求められるのである。

以上のヌスバウムの分析は、人々の結びつきの阻害要因になるスティグマのうち、高齢者に対するスティグマには他にはない特徴があることを明らかにした。すなわち、高齢者に対するスティグマは、将来、自分に跳ね返ってくるということである。

3. 共同体回復への道——シュタインによる哲学的分析

ドイツの現象学の哲学者エディット・シュタイン（Edith Stein）によれば、社会における人々の結びつきを困難にしている要因として、「心的感染」と「排他性」がある。まず、周囲の人が、怒り、憤慨、憎悪に駆られて、ある人々を攻撃すれば、どうしても、その言葉に触れた個人にその感情が感染する。感染の範囲は、陰口となって広がっていく。相互に攻撃し合い陰口を言い合う環境は、信頼に基づく人間関係の形成のためには適切ではない。次に、社会においては「排他

性」の意識がはたらく。ある異質な者を排除することで、自分たちの仲間意識を高めようとするということである^{1) 9)}。自分たちは排除されたくないという気持ちがはたらくことで、集団による異質な他者に対する攻撃が激化していくことがある。しかしこのような排除を受けた人の心の傷は計り知れない。中には、人間関係に恐怖を覚え、ひとりの世界に閉じこもってしまう者もいるであろう。一方、シュタインは、排除する側に立つ人たちも、さまざまなみじめな状態から免れられないという。それは、「欺瞞、……情欲、批判したくなる傾向、暇つぶしなど」といった状態である。それらが習慣化すると、「憂鬱、恐怖、憎悪、大胆な希望、名誉欲への傾向」、さらには、「誇り、貪欲、嫉妬、怒りなど」の感情がここに根づいてしまうとシュタインは述べる^{1) 10)}。このように、排除される側の傷も、排除する側のみじめさも深まってしまい、双方ともにそうした状況から脱皮するには大変な困難がある。

シュタインによれば、それでも人間は「本性上、……他者と存在を分かち合うように仕立てられている」「人間性は、その……本性からして、共同体の生へと招かれている」という^{1) 11)}。シュタインは、共同体の回復のため、とくに二つの点を指摘する。ひとつは、次のようなこころの準備をやはりどこかにもっておかなくてはならない。それは、人との関係においては、無理解、誤解、攻撃、軽蔑、過小評価などを経験することがあるという覚悟である。それでも、こころを完全に閉じてしまわないで、対話への希求の気持ちを絶たないことが求められる。その気持ちがあれば、誤解が解けることもありうるし、また別の集団で新しい仲間を見出せるかもしれない。二つめにシュタインは、人間関係における利害関係、成果、技術的側面だけではなく、精神的次元の重要性を指摘する^{1) 10) 12)}。人間には現実の利害や効用を超えたものに喜びを感じるこころがある。利害や効用の比較を離れたところに、人間同士の結びつきの原点を見出そうとすることがそこでは求められる。シュタインによれば、そのような人間同士の交流を実現するためには、人は他者に対してこころを開かなくてはならないという。他者に対してこころを開くこの行為にこそ、シュタインは個人が選択すべき「自由な所業 (freies Tun)」を見出すのである。すわなち、共同体の生に入るか、そこから離れるかに個人の生の形成の分岐点があり、その分岐点での決定は個々人の自由に任されているということである。そこでは、身体的、感覚的、物質的状況とは別の精神的世界に自らを移し置く場面もあるはずである^{1) 11)}。

シュタインによれば、こころを開くということは必ずしも社会のネットワークに対してオープンになるということであるわけではない。社会的ネットワークに参加する中で、個々人の相違が際立つことで、かえって個人の孤立感が高まることもある。シュタインが説くところのオープンであることは、何よりもこころを精神的世界のつながりに向けて開くということである。普段は社会的利害関係に忙殺され、そこでのやりとりで終始しがちな自分と他者のあり方から、こころの目をその内面のいのちに関わる次元に向けるということである。私たちは、「表層的な (oberflächlich)」多種多様な価値を追い求める日常生活を送っている。そのため、普段は、人間存在の深化した次元に目を向けることが少ない。「集中的に生きる人は少数である。たいていの人においては自我が表層において地位を占めており、それが揺らぎ深層に引き入れられるのは大きなイベントに因る」ことが多いとシュタインは指摘する^{1) 9) 11) 12)}。人間のいのちは、老い、病、死を経験する。それらは、社会における利害関係だけでは説明しきれない次元を示唆する。たとえば、家族との死別は、利害関係だけでは説明しきれないような人間存在のあり方を示すことがある。人間同士の人格の中心的な次元におけるつながりと周囲のささやかな支えや温かい眼差しのありがたさを感じ得ることがある。人格の中心的次元は、本来人間存在のうちにあったからこそ、病や死といったイベントにおいて表に現れてくるといえる。人間同士のどんな困難な状況にあっても、人間存在のこの内面のいのちの次元を信じて、他者にこころを開く態度をとろうとすることに、人間の自由な精神的所業が示されるのである。

以上、シュタインの哲学的考察は、人間が本来共同体の存在であるという認識を出発点とする。そこには、共同体形成の阻害要因の分析、及び共同体形成プロセスにおいて回避しがたい困難な経験についての洞察がある。シュタインの論述は、共同体形成過程において理不尽な辛い経験をするならば、私たちはどうしてもそこから離れていく傾向をもってしてしまうことを踏まえたうえでの考察である。

Ⅲ. 独居高齢者のインタビュー調査

社会の風潮の影響を受ける中で、高齢者も人との関係性を築くことに困難を感じている。医療者を含む周囲の者の態度如何で、高齢者も人との関係においてさまざまな反応をする。高齢者が独居にある状況の一側面として、共同体形成の困難の問題があると考えられる。

総務省統計局国勢調査（平成22年）によると、65歳以上人口のうち16.4%が一人暮らしとなっている。平成27年には一人暮らし高齢者数は592万人になり、過去20年間で2.7倍になっている¹³⁾。一方、内閣府「世帯類型に応じた高齢者の生活実態に関する意識調査」（平成18年）によれば、一人暮らし世帯では7.2%が「心配ごとの相談相手がいない」、11.2%が「近所づきあいはない」となっている^{14) 15)}。国立社会保障・人口問題研究所の推計（平成30年）によれば、2040年の独居率は、男性で2015年の14.0%から20.8%へ、女性で2015年の21.8%から24.5%へ上昇する見通しである¹⁶⁾。高齢社会が進展していく中、独居高齢者は今後ますます増加すると予測される。独居高齢者の孤立化に対する対策を講じることは喫緊の課題である。こうした対策は地域の実情に見合ったものであることが求められる。船木・山本・宮嶋・道信・栗屋の研究グループは、独居高齢者のインタビュー調査を行った^(注2)。以下、この調査のうち、周囲との関係性について語られた部分のみを記載し、共同体形成の観点から考察を加えたい。したがって、調査対象者の全体的な生活状況及び精神状況を構造的に提示することは目的としていない。

1. 調査の方法

調査対象者は、札幌市、留萌市、釧路市及び黒松内町在住の65歳以上90歳未満の独居高齢者であり、調査期間は、平成28年9月～平成29年6月である。調査は、インタビューガイドを用いた事例研究とした。インタビューは、独居年数、一人暮らしになった経緯、日課、一人暮らしの中で感じていること、周囲との関係、地域についての思い、日々の暮らしで支えになっていること、辛いときに必要なサポート、周囲や社会への訴え、今後の思いなどについて語っていただいた。また相互的な話の流れで、自由に語っていただき、内容について質的帰納的に分析した。研究参加者は月寒ファミリークリニック（院長・塩原康宏）、NPO法人るもいコホートピア（理事長・小海康夫）、NPO法人地域健康づくり支援会ワンツースリー（代表・北澤一利）、黒松内町国保くろまつないブナの森診療所（所長・寺田豊）から、紹介していただいた。自分の思いを語ることに支障があると考えられる医療依存度の高い独居療養者、及び認知症高齢者は調査対象候補者から除外した。

研究参加者には、研究の目的及び方法、協力の任意性と撤回の自由、個人情報保護、研究成果の公表について文書と口頭で説明し、書面で同意を得た。面接内容は研究参加者の了承を得て録音した。札幌医科大学倫理委員会の承認を得たうえで研究に着手した（平成28年8月15日、承認番号：28-2-28）

2. 結果

(1) 研究参加者の概要

研究参加者（A）は、72歳女性で、長年にわたって介護していた親を亡くし、その後20年間一人暮らしを続けていた。研究参加者（B）は、77歳女性で、夫を急に亡くし、その後2年3ヶ月一人暮らしを続けていた。研究参加者（C）は、72歳女性で、夫を病死で亡くし、1年10ヶ月一人暮らしを続けていた。研究参加者（D）は、72歳女性で、夫が病死した後、2年3ヶ月一人暮らしを続けていた。研究参加者（E）は、71歳男性で、妻と早くに死別し、その後同居していた娘が独立してから、2年一人暮らしを続けていた。研究参加者（F）は、73歳女性で、夫と死別し、13年間一人暮らしを続けていた。研究参加者（G）は、84歳女性で、事故により寝たきりになった夫を介護していたが、その夫と死別し、1年半一人暮らしを続けていた。研究参加者（H）は、88歳女性で、夫と死別し、2年4ヶ月一人暮らしを続けていた。研究参加者（I）は、72歳女性で、36年前に夫を亡くし一人暮らしになり、定年まで看護師の仕事が続けてきた。研究参加者（J）は、73歳男性で、妻と死別後、6年間一人暮らしを続けていた。

(2) インタビューの内容

【周囲とのコミュニケーション】

周囲とのコミュニケーションについては、以下のように語る高齢者がいた。

研究参加者（A）は、「でもね、何ほあれでもね、たまにはしゃべらなきゃだめだよね」と語り、話すことの大切さを訴えた。

また、研究参加者（B）も、「まあ家に一人でいても会話もないですしね、テレビばかりあれではダメだな」と語り、人となるべく触れ合い会話するように心がけていた。

このように、同居していた家族が亡くなり、一人暮らしを続けていく中で、人と話すことの大切さを実感している高齢者がいることがわかる。

【支えとなる関係性】

支えとなる周囲との関係については、次のように述べる高齢者がいた。研究参加者（C）は、「自分は夫を亡くしてはじめて、『はーって』。こんなに大変なんだなっていうことを感じました」と語り、死別の辛さは経験してみないとわからないと述べた。そして、時間が経過しても「喪失感とかそんなのが解決される」わけではないとしながらも、知人が「お話ししたり来たりしてくれることで紛らわすことはできた」と語った。

また、研究参加者（D）は、隣の人が朝、「カーテンが開かなかったらどうしたんだろうって」気にかけてくれることがありがたいと語った。

他にも支えとなる周囲との関係について次のように述べる高齢者がいた。

研究参加者（E）は、「たばこのポイ捨ていっぱいあるわけさ。それでカラスがもってくるごみ、今は枯れ葉、それを拾って」いたところ、通りがかりの人に「いつもきれいにしてもらってありがとうって」言われてうれしかったと語った。

研究参加者（F）は、「教えたり、無料奉仕ですけどね。行ったりやってます。だから嫌なことがあったけど、楽しい。助けられます。そういうおかあさんたち、年上の人たちにね」と述べ、困難な状況の中、ボランティア活動やその仲間に使われたと語った。

研究参加者（G）は、「大体いつも来るのは、7、8人から10人、もっといるんですけど、一回り下ぐらいの人たちがいて、それが大会に行ったりなんかするんで、……手助けを決めて。一回り違う。12違うんだよ」と述べ、歌や踊りの会での若い世代との交流に喜びを感じていた。

以上から、独居高齢者にとって周囲と支えになる関係について、次のようにいえよう。まず高齢者は何気ない話や、ちょっとした気遣いをしてもらえることが支えになっている。また、ゴミ

拾いやボランティアなど、人に喜ばれることが支えになっている。さらに若い世代との交流に生きがいを感じている。

【人間関係の構築の仕方】

では、独居高齢者はどのように人との関係を築いているのであろうか。

研究参加者（A）は、「もとの近所の人と年に5回ぐらい温泉に行くんですよ」と述べるように、以前からの知り合いとの交流を楽しんでいた。

研究参加者（H）に対して、「何かこれまでの生きる支えというか、洋裁をされていたというのは、本当に生きる支えになっていたということですね」と問いかけたところ、「ですから、お友達もたくさんいますので、そのつながりがいまだにありますのでね」と返答された。また、研究参加者（H）に対して、「健康の秘訣という、やっぱりふまねっと〔介護予防、認知症予防のためのあみを使った運動教室〕（〔 〕内、筆者挿入）に通うとか」と問いかけたところ、「そして、お友達に会う。そして、会っているいろんなお話を聞いたりして、『あらっ』て吸収する面もたくさんありますしね」と述べられた。

さらに、研究参加者（I）は、「『このままじゃもったいないから、なんかみんなで女性だけのサークルつくらない？』って言ったら、『つくろうつくろう』ということで。そして、言い出しっぺが私で、***の会って……。2週間に一遍ずつ金曜日にやっているんですよ」と述べ、自分たちで一緒に料理をしたりするサークルをつくったことを語った。

このように、高齢者は、以前からの知り合いや、人生で核となる趣味を通じて継続する人づき合いを育んでいる。また、教室を通じて新しい友達をつくったり、自分たちでサークルをつくったりして交流の場を拓けていることがわかる。

【共同体から離れる】

一方、共同体から離れた経験について次のように語る高齢者がいた。

研究参加者（J）は、一人暮らし高齢者を見守る推進委員をやっていたのだが、「その人のことを思って、『元気でやってるかな？ 話し相手になってあげるかな？』ということで行くんですけど、それでも文句を言う人がいるって言うからね。その辺は面倒なもんだからね」と述べ、支援活動を辞めたことを語った。

研究参加者（F）は、「習い事のやってる教室で、『……』って言われて……。すごくやられました。今でも涙が出ますね」「いじめは私は恐ろしい。大人なのに。そうやっていじめた人って自分がいじめたことはわからないんですもんね。いじめられた人ってのはやられた人間って、一生わかります。いろんな人がいますけどね」と述べ、教室でいじめに遭ったことを語った。また、「『……』というのは誰にも言ってなかったのがみんな知っているんですよ。その人たちが言って歩いて。……すごく寂しくて嫌な」と述べ、周囲の人たちのうわさに苦しんだ経験を語った。

研究参加者（H）は、「病気になる前は、何だかいっぱい集まってきていると思ったら、集会なのかしらね。何か、集会だか、勉強会だかと言っていましたよ。だから、そういう仲良くしていた方がいるんだけれども」と述べ、病気になったとたん、集まりでの人間関係が疎遠になったことを語った。

以上から、高齢者が共同体から離れることには次の要因があったことがわかる。すなわち、地域での独居高齢者支援活動をしていたが、苦情を受けたことによりその活動から遠のいた。いじめやうわさに苦しんで人づき合いから離れていった。病気が原因で人間関係が疎遠になった。

3. 考察——共同体への希求と共同体からの離脱

研究参加者（A）と（B）が発言するように、高齢者はこころのどこかで対話を通じた人との交流を求めている。その思いは同居していた家族がいなくなり、一人暮らしを続けていく中で強く

なる。同居家族がいた頃にはそこまで強く認識されなかったところの、人との交流への希求の気持ちをはっきりと表に出てきたといえる。同居家族の介護やそこでの諍いはそれはそれで大変だった面もあったが、それらから解放され一人になると、そうした関係性のあった存在の喪失感と、他に人と関わりをもつことの必要性を痛感している。このような高齢者はテイラーが言うところの人間が元来もっている希求を露わにしているといえる。そのような訴えに応えていくために、周囲の者は、個人の成果や利害関係に忙殺される日常の中であって、その奥に本来あるはずの道徳的源泉に立ち返る必要がある。それは、私たちの文化がもともともっていた人間同士の結びつきの感覚を呼び起こすことである。私たちの文化がどのような人間同士の結びつきをもともと求めていたのかを探求することが、対話の一步となるかもしれない。

高齢者は、何も大がかりな余興の場を求めているわけではない。研究参加者(C)と(D)が発言するように、一人時間が長い中であって、ふとした何気ない話や、近所の人気がかけてくれたことによって、こころが和んでいることがわかる。そこには人との小さな交わりの瞬間がある。精神分析治療医のドナルド・ウィニコット(Donald Winnicott)は、「細やかなやりとり(subtle interchange)」の概念を提唱し、何か特別な問題についてではなく、日々のことやいろいろな好みといった、さりげない話をつづけていくことの重要性を指摘している。軽い話、ちょっとした気遣いが高齢者のこころの慰みになっていることが今回の調査でも確かめられた^{1) 17)}。

中には率先して地域のためにゴミ拾いをしたり、ボランティア活動をしたりしている研究参加者(E)や(F)のような高齢者もいる。人に喜んでもらうことの満足感や、人の役に立ちたいという独居高齢者の気持ちは前回の調査でも確かめられた¹⁵⁾。ヌスバウムは、老いても非常に元気である人物として、キケロの『老年について』の中で描かれているカトーを引き合いに出し、「働くことは健康と幸福にとって非常に重要である」と述べる⁸⁾。社会活動の第一線からは退いてはいるが、人はいくつになっても人に喜ばれることに喜びを感じるということが今回の調査でも認識される。このことは、人の役に立ちたいという気持ちに応えられるような、高齢者の社会における活動の場作りの必要性を示唆する。

また、研究参加者(G)が述べるように、高齢者のみの集いの場が形成されがちな傾向がある中、高齢者は他世代との交流も望んでいる。とかく高齢者のみの集まりになりがちな傾向がある中、世代間交流を進めていくことは、高齢者の生きがいのためだけではなく、ヌスバウムが指摘するように、若い世代において人生を全体として見た場合の自己理解と自己受容を促すためにも重要であると考えられる。こうした世代間交流は何も世話をする側と世話をされる側の関係というわけではない。同じ目標に向かってともに活動することや、学び合う場であることも可能であるはずである。こうした世代間交流を促進することは高齢者の活力を高めたり、高齢者からの学びの場を形成したりするための今後の課題のひとつである。

このように共同体への希求の思いをもち、その実現の場を形づくる高齢者がいる一方で、共同体から離れていく高齢者もいる。研究参加者(J)は、むしろ率先して一人暮らし高齢者の見守り活動をしていたが、余計なことをしないでほしいという苦情を多く受ける中で、自治体での活動から離れていった。精神医学者・医療哲学者の平山正実氏が理事長を務めていたグリーンケアの活動報告では、強さの倫理を示す自立偏重社会では、悲嘆に苦しむ者がいても、「いらぬお節介はするべきではない」のではないかという戸惑いを周囲の者が思うということが指摘されている^{12) 18)}。今回の調査では、こちらがよかれと思ってすることでも、苦情を受けることによって活動への意欲をなくしていく高齢者がいた。ここでは、困っている人を助けたいという気持ちと個人の問題には立ち入らないでほしいとの訴えとの葛藤がある。地域ぐるみで孤立しがちな高齢者を支えようとする活動と、個人の問題は個人で決定するのがいいという社会の風潮との齟齬がそこに反映しているといえる。

研究参加者（H）が発言するように、比較的元気なうちはその人のもとに集まってくるが、病状が重くなったとたん、周囲の者が離れていくことがわかる。ここでは、病は人を結びつけるのではなく、離す要因になっている。すなわち、ヌスバウムが指摘するように、病がスティグマのひとつとして共同体形成の困難として機能している可能性がある。

研究参加者（F）が発言するように、趣味の集まりであっても、いじめを受けたり、個人的問題がうわさとなって知れ渡ることによって、集まりから離れていく高齢者がいる。いじめはいくつになっても辛いものであり、そうした経験が高齢者を孤立化させる要因のひとつになっている。今回の調査では、研究参加者（F）は、趣味のグループにおいて苦悩を経験はしたが、その後ボランティア活動において新しい仲間との関係に喜びを見出している。シュタインが描写するように、共同体への希求の気持ちがなくなる限り、人はどこかでともに生きる場を見出していけることを示している。

IV. おわりに

本稿でとり扱った哲学者、テイラー、ヌスバウム、シュタインは共同体形成への希求を止めないことを訴える。困難な状況にあっても、テイラーは私たちの文化の道徳的源泉に立ち返ること、ヌスバウムは、人生全体における自己理解と自己受容の必要性を、シュタインは、自由に基づいてこころを開くことの重要性を説いた。独居高齢者へのインタビュー調査においても、対話の大切さ、世代間交流の意義、共同体形成の困難とそれへの希求の気持ちが確かめられた。やはりコミュニケーションは大事であると話す人がいた。対話を通じた人との関係を、高齢者もこころの奥では求めているといえる。趣味やボランティア活動、サークル活動などによって、毎日の生活にリズムと張りをもたせている高齢者もいる。その一方で、周囲からの苦情、いじめやうわさ等に苦しみ、集団から離れていく高齢者もいる。そのような人々が、話し相手をこころのどこかで求めているとするならば、孤立したままの状態は望ましいとはいえない。

人は個人として生きるだけではなく、共同体の成員としても生きる存在である。その双方の側面がバランスよく実現できることが望ましい。その双方の側面に関して現代社会は困難な状況にあると考える^(注3)。とくに共同体形成は現代社会の抱える重要な課題のひとつである。さまざまな困難に直面するとやはり人は共同体から離れていく傾向をもつであろう。そうした困難な中にあっても、共同体形成への道を模索し続けることは重要であると考ええる。

一方、本稿でとり扱った論者の考察は、いくつかの課題を残している。テイラーは主に英米の文化圏の道徳的源泉として「実践的博愛の精神」を示すが、それがそのまま私たちの文化に当てはまるとは考えにくい。私たちの文化の道徳的源泉の探求が課題となるであろう。また、ヌスバウムの主張する全体的自己存在の理解と受容は、一足飛びにできることだとは思われない。ここには教育の課題が示されている。世代間交流を促すための倫理教育と、若いうちから高齢者に触れ合う場をできるだけ多く提供することが必要だろう。シュタインの主張する、共同体の生に向かう精神的次元における自由な意志は、日常生活においては認められにくいものである。とくに人間同士の激化した対立の場面に遭遇するならば、人は一層、そうした場面を超えた次元を感知することは難しいであろう。それでもシュタインが言うように人を信頼する道に至ろうとするならば、その道程にはさまざまな紆余曲折があるはずである。共同体に入るか離れるかは行ったり来たりで、どちらかに最終的にその舵は切られる。その舵を、どんな状況下にあっても共同体への道にとるか否かは、私たち個々人の決定に委ねられている。

本稿は、共同体形成の問題に関する哲学的考察に主軸があり、独居高齢者のインタビューのうち、共同体形成のあり方の側面に関してのみ注目して内容を分析した。独居高齢者の自己との関

係における工夫や努力などを含め、より全体的な状況を示すことはできなかった。また、地域による相違、性差も明らかにすることもできなかった。これら、データを全体的に分析することで明らかにすべき点については、今後の課題とさせていただきたいと思う。

謝辞

本研究にご協力いただきました札幌市、留萌市、釧路市及び黒松内町在住の高齢者の皆様、月寒ファミリークリニック（院長・塩原康宏）、NPO法人るもいコホートピア（理事長・小海康夫）、NPO法人地域健康づくり支援会ワンツースリー（代表・北澤一利）、黒松内町国保くろまつないブナの森診療所（所長・寺田豊）の皆様に深く感謝いたします。

本稿は、北海道生命倫理研究会第11回セミナー（2018年1月27日、札幌医科大学）における発表に加筆修正したものである。また、第36回日本医学哲学・倫理学会大会の研究発表（2017年11月11日、帝京科学大学）における会員の議論からいくつかの着想を得ています。

本稿は、文部科学省科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C、「北海道における高齢者の孤立化に関する発展的研究」、課題番号16K04075（研究代表者：船木祝、研究分担者：山本武志、宮嶋俊一、道信良子、栗田剛）の研究成果の一部である。

【注】

注1 ドイツの社会心理学者フィリップ（Sigrun-Heide Filipp）らは、こうしたステレオタイプ化したスティグマの発生メカニズムの原因として以下の4つをあげている。①「社会心理学説（sozialpsychologische Theorie）」に基づくもの。これは、老いや病、障がいなどに見舞われている価値が低い集団である外集団と異なり、そのような状況に陥っていない自分たちが所属する内集団において統合と承認を確保しようとするものである。②「コンフリクト理論（Konflikttheorie）」に基づくもの。すなわち、自分たちの集団内でのよからぬ状況の責任を外集団に押しつけることによって、自集団の安全・地位・名誉を守ろうとするものである。③「動機づけ心理学（Motivationspsychologie）」に基づくもの。これは、周囲の者の不安感の裏返しであって、自分たちが恐れている状況を具現している人たちを一層否定的評価をすることにより、自分たちとは異なる存在として位置づけようとするものである。④「認知心理学的見方（kognitionspsychologische Perspektive）」に基づくもの。これは、迅速で効率のいい情報化社会を反映しており、レッテルを貼ることにより、問題をはやく処理しようとするものである^{5) 6)}。

注2 独居高齢者のインタビュー調査に関連した先行研究については、以下の文献15)を参照。

注3 ドイツの現象学の哲学者マックス・シェラー（Max Scheler）による、人が孤独であることの意義についての考察については、以下の文献12)を参照。

【文献】

- 1) 船木祝：弱い立場の人々を支える社会の倫理についての一考察——「強さの倫理」と「弱さの倫理」——，人体科学，25(1)：13-22，2016。
- 2) 生命倫理百科事典翻訳刊行委員会（編）：生命倫理百科事典，Ⅱ巻，815，820，東京：丸善

出版, 2007.

- 3) Charles Taylor: *The Ethics of Authenticity*, Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press, 5, 29, 32-33, 40, 44-46, 58-60, 79, 101-102, 105-107, ¹¹2003 (¹1991). チャールズ・テイラー (著), 田中智彦 (訳): <ほんもの>という倫理——近代とその不安, 6, 41, 45, 57, 61-63, 72, 80-82, 109, 137, 139, 143-146, 東京: 産業図書, 2004.
- 4) 栗屋剛, 穴戸圭介, 加藤穰 (編): 生命倫理学講義スライドノート, 第3版, 4, 岡山: ふくろう出版, 2016.
- 5) 船木祝: 独居高齢者の社会的・精神的状況に関わる倫理原則の一考察, 北海道生命倫理研究, 2: 10-19, 2014.
- 6) Sigrun-Heide Filipp, Anne-Kathrin Mayer (Filipp et. al.): *Bilder des Alters. Altersstereotype und die Beziehungen zwischen den Generationen*, Stuttgart: Kohlhammer, 59-62, 1999.
- 7) Nussbaum, Martha C.: *Hiding from Humanity. Disgust, Shame, and the Law*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 16-17, 220-221, 322, 334, 2004. マーサ・ヌスバウム (著), 河野哲也 (監訳): 感情と法——現代アメリカ社会の政治的リベラリズム, 20, 280-281, 404-405, 420, 東京: 慶應義塾大学出版会, 2010.
- 8) マーサ・C・ヌスバウム, 田中あや訳: 老いとスティグマと嫌悪感, 思想, 6 (第1118号): 6-24, 2017.
- 9) Stein, Edith: *Beiträge zur philosophischen Begründung der Psychologie und der Geisteswissenschaften*, Edith Steins Werke, Bd. VI, Freiburg im Breisgau: Verlag Herder, 223, 241, 247, Neudruck 2010 (¹1922).
- 10) Stein, Edith: *Kreuzeswissenschaft*, Edith Steins Werke, Bd.I, Freiburg im Breisgau: Verlag Herder, 54-55, 72-73, ³1983 (¹1953).
- 11) Stein, Edith: *Endliches und ewiges Sein. Versuch eines Aufstiegs zum Sinn des Seins*, Gesamtausgabe, Bd. 11/12, Freiburg im Breisgau: Verlag Herder, 369-370, 400, 425, 430, Neudruck 2006 (¹1950).
- 12) 船木祝: 孤独圏と共同体, 人体科学, 26(1): 13-23, 2017.
- 13) 朝日新聞, 2018年1月4日朝刊.
- 14) 内閣府: 世帯類型に応じた高齢者の生活実態等に関する意識調査, 2005.
- 15) 船木祝, 山本武志, 旗手俊彦, 栗屋剛: 高齢者の一人暮らしを支えている精神的・社会的状況, 北海道生命倫理研究, 3: 13-26, 2015.
- 16) 国立社会保障・人口問題研究所: 日本の世帯数の将来推計 (全国推計), 2018.
- 17) D.W.ウィニコット (著), 北山修 (監訳): 抱えることと解釈——精神分析治療の記録, 299-300, 東京: 岩崎学術出版社, 1989.
- 18) 平山正実 (監修), グリーフケア・サポートプラザ (編): 自ら逝ったあなた、遺された私——家族の自死と向き合う——, 215, 東京: 朝日新聞社, 2004.